

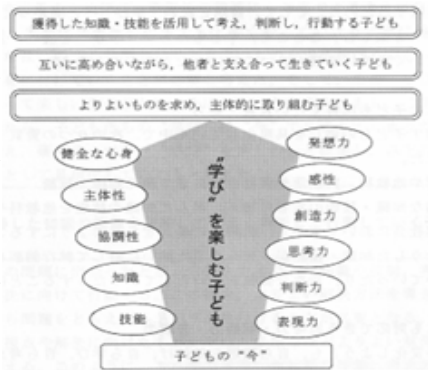
- 1 派遣期日 令和4年7月14日(木)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 茨城大学教育学部附属小学校
所在地 茨城県水戸市三の丸2-6-8
<http://www.esch.ibaraki.ac.jp>

3 研修内容

(1) 視察校における研究の取り組み

研究主題「“学び”を楽しむー自己調整力を働かせるー」

茨城大学附属小学校では、児童が「“学び”を楽しむ」姿を、学習材・他者・自己の三者とのかかわりの中で必要な資質・能力を身に付けたり、それらを駆使して問題を解決したりすることに没頭し、成長していく姿と捉えて主題に設定している。今年度は「自己調整力を働かせる」をサブテーマに研究を行った。まず、子どもたちと学習との【出会い】を大切にする。教師が仕組んだ【出会い】から、子どもたちは課題を見出し、自ら課題解決のための学習に取り組む。単元の学習を終えた子どもたちは、次のステップを目指して【広がり】のある姿を見せてくれることを期待している。



【図：目指す子どもの姿と育てたい資質・能力】

(2) 公開授業 第3学年 外国語「好きなものは何だろう」指導者 小池 祐一 Paa-kofi Aikins

① 他教科と関連した学習材の設定

これまで学習した英語表現を用いて、相手の好きなものについてインタビューをし合い「好きなものランキング」を作成する。結果は算数の時間に学習した棒グラフに表す。これにより、子どもたちの「知りたい」「伝えたい」という思いを高め、学習で得た「知識・技能」を実際の日常生活での場面で活用する力として育成していく。

② 思いが「伝わった」と実感できる言語活動の工夫

インタビュー活動では、自分の伝えたいことが伝わっているか、適切に情報が手に入れたかどうか、繰り返し相互に確かめ合う必要がある。子どもたちは互いの意見に対して「Me, too.」「Oh, really?」などと反応を示しながら会話をを行った。

(3) 公開授業 第6学年国語科「“あっ！”と発見 古典のとびら」指導者 菅原慎也

① 様々な古典文学を同一単元で扱う単元構成

古典文学の「おもしろさ」「不思議」「現代とのつながり」「日本古典と中国古典のつながり」などについて、子どもたちが自らつながりを見いだして親しんでいくことをねらい、日本古典と中国古典を同一単元で扱う。

② 各古典文学の冒頭に加え、日常生活に結びつく内容の提示

古典文章と現代語訳を用意し、往還的に読むことができるようにすることで、子どもたちは、古語と現代語の意味の違いに気付いたり、昔の人の言葉の使い方について探ったりするようになる。こうした気付きを、子どもたち同士で共有したり、意見を出し合ったりする時間を確保する。

(4) 分科会

研究協議では、「言葉をすぐる」意味について協議した。児童は、様々な言い回しや語彙を身に付けていくが、よりよい言葉を考えようとするには至っていないという認識から、自分の思いを的確に伝えるために、自分の語彙の中から選りすぐっていくことの大切さについて話し合いがもたれた。

4 感想

授業を参観し、「“学び”を楽しむ」ためには、課題(教師のしかけ)がまず大切になってくると感じた。子どもたちが既習の知識を活用しながら、他者と協力して課題に取り組めるように、ねらいに迫る課題を設定していきたい。

- 1 派遣期日 令和4年10月28日(金)
2 派遣先 第77回 関東甲信静数学教育研究大会 山梨大会
(オンライン 水木小学校)

3 研修内容

(1) 研究への取り組み

数学的に考える力を育成する授業の創造
～自立的・協働的な学びをとおして～

山梨大会では、「教師は授業で勝負する」を合い言葉として伝統的に授業を公開し、こどもたちの学ぶ姿を通して、新たな算数・数学教育を提案してきた。今大会の研究主題は、これからの授業作りの視点となるべく設定されたものである。特に「数学的に考える力」には、これまで大切にしてきた数学的な考え方を重視した数学教育とともに、改訂学習指導要領の「数学的な見方・考え方を働かせ数学的に考える資質・能力を育成する」という思いが込められている。

(2) 記念講演 「令和の授業づくり 数学的に考える資質・能力の育成を目指して」

講師 東京学芸大名誉教授 藤井 斉亮

令和の日本型学校教育の柱は、ICTの活用と個別最適な学びの実現である。この柱が、学習指導要領に示す「主体的で対話的な深い学び」と整合していくことが求められている。コロナ禍で進んだ GIGA スクール構想を受けて、ICTを活用しながら、主体的で対話的な深い学びを目指すことが重要であり、ICTの活用を通して、協働的な学びを実現することが求められている。

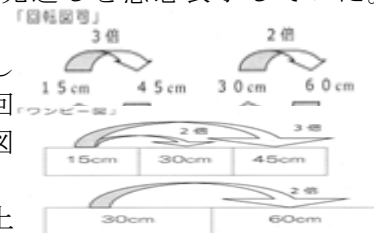
(3) 授業実践から 第4学年「倍の見方」 指導者 甲府市立北新小学校 樋 惇紀

① 導入の工夫

2本のチューブを提示し、どちらがよく伸びるかを問うた。問題の提示は大型モニターを使用し、チューブの広告風に表示したことで児童の関心は高まった。児童の机上には三角柱が用意されており、教師側に向けた色で自分の見通しを意思表示していた。

② 自力解決・比較検討段階の工夫

自力解決の際、式や言葉だけでなく図を使って表現している児童が多いようだった。テープ図だけでなく、「回転図司」や「ワンピー図」と呼び合う、クラス独自の図を使って自分の考えを表現している児童もいたようだ。比較検討の場面では教師が数名の児童の考え方を取り上げ話し合う様子が見られた。



【図：上「回転図司」下「ワンピー図」】

③ 部会での話し合い

今回は、「倍の学習をする際に差の考え方を残すことは妥当か」という視点で議論した。自分も含め多くの教員がは妥当だと考えていた。まとめの際に、差の考え方と比の考え方を使って比べる場合について紹介するとよいのではないかと考えた。

(4) 分科会

① 実践報告 報告者 千葉市立菅田小学校 爲房 伸太郎

「ステップカード」というヒントカードを使って学習を進めた実践事例が紹介された。毎回の授業の中でつまずきの段階に応じて4種類のヒントカードを用意するものである。事前に作ったヒントカードが理解できず、児童が困惑したり、自分のつまずきの段階が分からず、適切なヒントカードを選べない状況も想定しなくてはならない。

② 実践報告 報告者 銚田市立銚田北小学校 中村 仁美

授業を「つかむ」「見通す」「考える(個)」「交流する(グループ)」「交流する(全体)」「振り返る」という一連の流れに沿って行いスタンダード化していた。スタンダードの大切さとともに、柔軟に授業を作り上げる大切さについても議論した。

(5) 感想

4年生の「倍の見方」では、差の考えを残すかどうかよりも、問題文を正しく把握させることが大切だと感じた。児童により解釈が異なり、最後まで倍の見方に到達しない児童も見られた。「よく伸びる」とはどんな意味なのか、きちんと解釈させたい。また、実物が用意されていたので、実際に触れさせてみると実感を伴うのではないかと考えた。